

藤香会だより



新しい年を迎えて

副会長 毛屋嘉明

あけましておめでとうございます。
昨年はコロナウイルスの感染拡大により多くの行事が中止になる中、藤香会では感染防止に心がけ、主な行事を実施できました。



10月29日に崇福寺において「黒田長政公の400回遠忌法要」が大徳寺側から30余名の僧侶を迎え、盛大に執り行われました。

11月3日の福岡市博物館における文化講演会、11月20日から21日の姫路への史跡めぐり、12月3日のモントレ・ラ・スールでの忘年会などすべての行事が滞りなく実施できました。今年も初めから藤香会の行事が続きます。

2月12日の東長寺における忠之公の法要、引き続き3月20日の崇福寺における如水公の法要、5月3日から4日のどんたくなどです。都度、ご案内は差し上げますが、今年には特に黒田長政公の没後400年になりますので、3月25日に藤香会主催の記念行事を計画中です。これは、福岡市の「桜まつり」や「大濠まつり」と連携を取りながら実施するもので、藤香会として身の丈に応じた行事をやりたいと実行委員会を立ち上げて、企画を練っております。近いうちにその概要をお知らせできるものと考えております。

16代当主の黒田長高様も、去年11月の福山藩校サミットに続く、姫路の史跡めぐりにも出席

第34号
令和5年1月1日発行
発行者 一般社団法人 藤香会
事務局 092-724-0007
発行責任者 毛屋 嘉明

されました。来福お願いについては、理事会で十分に協議し決定したいと思えます。
新しい年が皆さまにとって、健康で活躍できる年となるようにお祈り申し上げます。

長政公第400回遠忌法要



方丈への門に掲げられた藤巴の幕

最初に京都・大徳寺の僧侶をはじめ30名の僧侶による開山(円通大応国師)忌法要が執り行われ、その後莊嚴(しよごん)具が長政公のご位牌に替えられて「長政公四百年祭」として法要が営まれました。大応国師は時の後宇多上皇より死後に国師号(勅諡号)を日本で最初に賜った僧侶として有名です。文永9(1272)年に崇福寺の住持(じゅうじ)となりました。

法要は、崇福寺ご住職・明永啓道老師の五体投地に続いて読経の中を長高様、山崎会長、毛屋副会長、檀家総代の順の焼香で始まりました。藤香会会員は廊下に列座して、香炉を順に廻しながらの焼香となりました。最後に若いお坊さまの表白(ひょうびやく)があつて、滞りなく法要が済みました。
方丈での法要の後、崇福寺境内にある黒田家

墓所にてお坊さまの読経の中で各自焼香をいたしました。

四百回遠忌法要には、藤香会会員65名のほか

姫路・播磨の黒田武士顕彰会、中津黒田武士顕彰会、東蓮寺藩の直方郷土歴史

研究会、秋月藩の秋陽会からの参加もあつて総勢82名、また檀家の方々からの参列もあつたので、大規模な法要となりました。

文化講演会が開催されました



朗読 山崎英高 先生
福岡市博物館 講演

11月3日の文化の日、福岡市博物館で恒例の文化講演会が開催されました。

博物館の学芸員高山英朗さんによる「長政の筑前入国」と題しての講演でした。

藤香会会員55名、一般の参加者約50名の100名を超える参加者が熱心に講演に聞き入っていました。

山崎会長の挨拶、吉田理事の講師の紹介に続いて高山先生の講演が始まりました。

長政という点、合戦で勇猛果敢に先陣を切つて戦功をあげるイメージがあるが、それは一面では家臣の助けを必要とする戦いぶりであったという点を文禄の役(秀吉の朝鮮出兵)での平安道・嘉山の戦い、関ヶ原に先立つ合渡川合戦における戦いのエピソードを「新訂黒田家譜」から引用して説明された。

黒田家伝説である調略についても、福島正則、吉川広家・毛利輝元、小早川秀秋に対して相手



法要に参列した長高様はじめ藤香会会員

の意見を聞きながら東軍(家康方)に味方するかまたは中立を保つように書状のやり取りを行なった。それらが功を奏して関ヶ原は東軍の勝利となった。

この結果、所領の分配では長政は四国を望んだが、家康の意向で筑前を拝領することになった。このことは長政が死去する直前(8月2日)に書かれた「遺言覚」によっても明らかである。

高山先生の菌切れの良い1時間半の講演もあつという間に終了しました。今年も引き続き、長政の筑前入国以降の話を楽しみにして散会しました。

藩校サミットと史跡巡り

11月19・20日、全国藩校サミット福山大会が開催されました。平成14年、江戸幕府昌平坂学問所(湯島聖堂)での大会が初めて、今回は19回目となります。

福山藩は当初は水野、奥平家と続き、幕末は老中を勤めた阿部家と藩主が移り変わります。藩校であった誠之館(現・県立福山誠之館高校)は日米和親条約を締結した七代藩主阿部正弘が1855年に創立しました。校名は四書の中庸にある「誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり」に由来しています。生徒は、入学するとその一節を諳んじることが義務となつていま

す。大会のプログラムで、その中庸の素読が披露されました。
大会は旧藩主紹介から、今回は32藩の当主が壇上に上がられました。もちろんわが藩のご当主・長高様も登壇されています。

今回は長高様ご夫妻をはじめ藤香会から6名、修猷同窓会から2人、修猷館高校から教諭2名の計12名の参加となりました。
交流会はご当主や藩校関係者で約230名の規模でした。恒例の二次会は秋月藩、高鍋藩そして福岡藩の合同の18名で開きました。

翌日のエクスカッション(周遊見学)は誠之



修験道者と演奏される米村旭翔さん

一昨々年に亡くなられた本会会員であった筑前琵琶奏者の中村旭園先生を追悼する筑前琵琶の演奏会が8月28日、大濠公園能楽堂で行なわれました。先生は藤香会が営む藩主の法要や主な行事にも精力的に参加されて琵琶を演奏していただきました。

故中村旭園先生 追悼演奏会開かれる

翌日は、播州黒田武士の館から妻鹿にある如水公の父・職隆公墓所や母里太兵衛生誕地を経て廣峯神社へ。当社社では姫路市長の清元秀泰さんが迎えられ、長高様ご夫妻、山崎会長に挨拶をいただきました。昼食後は境内にある官兵衛神社に参拝しました。官兵衛神社は祭神が水鏡権現(如水公)、ご神体はガラス製の茶碗(夫婦茶碗で、ひとつは福岡の圓應寺にある)とクロスです。最後の見学先は姫路城です。近年、改修された国宝の城郭です。

館高校の資料館でその伝統に触れ、伝統大切にすることが藩校教育を現代に受け継ぐことにつながるということを感じました。史跡巡りは11月20日・21日は藩校サミットからの合流組を含めて31名が姫路に参集しました。初日の長高様ご夫妻を囲んでの懇親会には播磨の黒田武士顕彰会の会員も多数参加され、10月29日崇福寺での長政公四百回遠忌法要以来の再会となりました。

この日の追悼演奏会は福岡旭会(米村旭翔会長は本会会員)が主催したもので、第70回の筑前琵琶観賞会を兼ねています。演目は、「玄清法流琵琶法楽」としてお坊さんたちの琵琶演奏をはじめ、宝満山以外では初めての演奏という米村旭翔さんの「竈門山」を宝満山の修験道の坊のお坊さんたちのほら貝と一緒に、その他「名犬一文字」、「俊寛」、「貧女の一燈」、「天の羽衣」など旭園先生作曲の数々が演奏されました。

会員クリック③



監事 田中雅美

私は黒田家の藩校である修猷館高校の出身(昭和50年卒)です。同窓会本部の役職を20年以上にわたり勤めさせていただいています。

また私は福岡黒田ライオンズクラブの会員でもあります。ある資料に、「黒田」の名称については270年の間福岡を治めた藩主黒田家の「黒田」を名乗るのは明確に福岡のクラブということを示すし、全国的にも認められ誇りもあるということでの名称に決まりました。内々黒田家の了解も得たものではなかったかな(藤香会会員。故三野原和光氏)とあります。また「黒田」という名称は藤金之助さん(故人、藤香会会員)が名付け親ですとの記述も。私はその故藤金之助さんの勧めで藤香会に入会しました。私には藤香会を利用してある目標がありました。私は平成22年、全国藩校サミット松江大会に出席しました。藩校サミットは、平成14年に最初の大会が東京で開かれ、以後全国を回る形で毎年開催



T理事から頂戴した「金草鞋 海道行脚の巻(十辺舎一九著 歌川よし磨画)から豊前、筑前、筑後の部分を見てみる。この「金草鞋」は奥州山家の狂子ぶたりが伊勢神宮・京・大坂を廻った後、大坂道頓堀から船で金毘羅、安芸の宮島を経て九州に入り、豊前小倉から宇佐神宮、山国川、耶馬溪・英彦山へ向かう。耶馬溪の羅漢寺から英彦山までの道中は坂ばかりで足も疲れたので駕籠を雇う。「かこき四人の

されている催しです。江戸時代の優れた文化や教育にスポットを当て、特に藩校の教育内容を現代の教育に生かしていこうという趣旨の大会です。私は参加してすぐ、福岡での開催を夢見るようになりました。主催者である漢字文化振興協会に連絡を取り、夢に向け行動を開始しました。そうこうするうち、秋藩が誘致に動いているとの情報。秋月での実施が決まれば、当分は福岡での開催は不可能です。半ば諦めかけました。しかしながら事情により秋月藩が開催を断念。そのため福岡での開催要請が来たのです。あわてました。誘致に動いていたといっても、私一人孤軍奮闘していただけです。開催の条件として、開催地のご当主の参加は必須でした。実をいうと、それまで長高様は藩校サミットにはあまりご興味なかったようで、参加実績はなかったのです。ここで、藤香会の会員であることを利用して、長高様に大会開催の要請がある旨連絡を取り、参加の内諾をもらうことができました。修猷館同窓会が実行委員会の主体となり開催が実現しました。平成27年10月のこと。藤香会から数多くの会員にご参加いただき、交流会でのホスト役を務めていただきました。今も藩校サミットの参加は私のライフワークとなっています。次の目標は、黒田家と修猷館高校・同窓会との関係を密にすることです。それには藤香会の存在も重要であると思っています。最後に、修猷館高校には、「カンタータ・修猷賛歌」という、オケ付きの合唱曲があります。創立200周年を記念した作られた曲です。この曲の再演も夢の一つです。ちなみに私の趣味は合唱です。

- #### ★新規入会員紹介
1. 一般会員
 - 松下 太 竹川 克幸
 - 加藤シオー 加藤 睦子
 - 吉田美佐恵 野村 昌弘
 - 伊藤 道子 宇都宮義也
 - 宇都宮みゆ 佐々木 滋
 - 光井 章英 山崎 清登
 - 清水 鳳齋 清水 尚武
 - 中村 光博 前田 博親
 2. 賛助会員
 - 50企業・団体



金草鞋, より高麗鳥の部分

うち、ふたりはほうし(法師)なり。なにゆえ法師の身にかやうなわざ(このような業)をなすことと聞けば、法師の駕籠昇が言うには「われわれはひこさん番(伏)なり。この番には山ぶし(伏)あり」。それぞれにとしよく(徒食)をなして、世を直したるなり。われわれはなにもおぼへたることなし。町にうがって渡世とすれともかやうの人足に雇われて出るなり」と言つて山伏も働かなければ食つてゆけないというのである。また筑後ではカチガラスを見て、「高麗鳥之図 この鳥、肥前・筑後の国に多し。尋常の鳥よりは形小さく、白き文あり。里人の庭樹あるいは林中に群集す。その形容、甚だ美麗なり。」と記述している。この旅人二人が家を出るときのおさんとの泣き別れの場面が面白いがそのエピソードはまたどこかで。